

物みなは新たしき良しただしくも人は古りゆくよろしかるべし

作者未詳

『万葉集』巻十「雑」の一首。

「万物は新しくなつてゆくのがよい。ただしかし人間は、年を重ねて古びてゆくのがよろしいにちがいない」。

年配の作者の居直りと強がりの歌かな、と思うけれども、それほど単純でもないらしい。この歌の前に次の一首があり、二首の前には「嘆旧」の詞書が置かれている。

冬過ぎて春し来れば年月は新たなれども人は古りゆく

作者未詳

つまり、「旧りゆくことを嘆く」の題のもとに詠まれた二首で、「年年歳歳花相似タリ、歳歳年年人同ジカラズ」(劉希夷「代悲白頭翁」という漢詩をすぐさま思い出す、老いを嘆いた二首目に対し、「いやいや、そうばかりでもありませんよ。人には古びたなりの良さがあるでしょう」と返したのが二首目。これ、題に反するんじゃないの?)と



思わなくもないけれど、たとえば老若入り混じる宴の場で、二首は一对になって座を盛り上げたのかもしれない。

「春雑歌」のこの二首の直前には、「野遊」四首があり、貴族たちが民間習俗にならつて春の野遊びの宴を楽しむ場面が見える。旧暦春三月は若菜摘みのころであり、万物新生を祝う宴で、「嘆旧」を詠む趣向をおもしろがり、さらに老いを嘆いたり、いやいやと返したり、そんな賑やかな場面を想像すればよいのだろう。なかなか楽しそうだ。そしてこういうときは、変に技巧を凝らさず単純に詠んで、みなをわつと湧かせることが大事なのだ。

ところで、「物みなは新たしき良し」に現代人のわたしは立ち止まる。万葉人にとつての万物はまず自然であり、日常の周辺もまた、新しくなることは多く良きものをもたらしにちがいない。が、物みなが新しくなりすぎて、ついにAIの世に分け入ってしまったいま、新しきものは希望であると同時に脅威でもある。

AI時代長寿時代のいま、この歌は「新たしき」命題ではないかとさえ、思われてくる。

(小島ゆかり)